

# 日本におけるフィンランド教育に関する一考察

山田 将範 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 森川 みえこ

キーワード：フィンランド教育，社会構成主義，落ちこぼし

## 1. 緒言

2009年，経済協力開発機構（OECD）が世界65カ国の約45万人の15歳を対象に行った学習到達度調査（PISA）においてフィンランドは，世界トップクラスの成績を収め，世界から注目されている。フィンランドは平等と個性を両立させる教育を目指している。そのためPISAの各分野別習熟度レベルの結果においてフィンランドは低学力層が少なかった。一方，日本は低学力層と高学力層に大きく分かれ，2極化している。このようにフィンランドでは落ちこぼしのない教育がなされていることがわかった。

そこで本研究は，日本教育と比較し，フィンランドの落ちこぼしのない教育から学べる点を検討した。次にフィンランド教育から学べる点をもとに，今後の日本教育が向かうべき方向性について検討した。

## 2. 研究方法

フィンランド教育と日本教育に関する文献やデータを基に考察する。PISA調査は，15歳を対象としているので義務教育9年間の教育課程を中心に扱うものとする。

## 3. 結果と考察

### 1) 学校教育制度

就学前学級により学校への環境の変化に対応している。教育は無償である。10年生制度はゆっくりと学びたい子を安心させる。

### 2) 教師の養成と勤務

修士号取得，長期間の教育実習によって早い段階で教師を専門家として育てようとし

ている。十分な授業準備の時間が確保されている。

### 3) 教育学理論

社会構成主義に基づいた教育学理論の支えにより，フィンランドの子どもたちは，社会の中で自分の将来を考えて，仲間と協同し目標を持っている。区別をしない異質生徒集団方式をとっている。

### 4) 教科書

地域の生活に応じ，子どもの学習速度に合わせた支援を可能するために生徒の実態に合わせた教科書が使われている。

## 4. 結論

フィンランド教育は子どもが自ら学ぶことを基本に据えている。どのルートを通っても，自分が学ぶ気になれば誰もがいつでも学ぶことができる。教師を高い専門家として養成し，教師にとって働きやすい職場が作られている。フィンランド教育のような社会構成主義を基盤とした平等と個性を両立させた教育は今後の日本教育が向かうべき方向性だといえた。

## 5. 参考文献

- ・藤田英典(2006)「教育改革のゆくえ」岩波書店
- ・福田誠治(2006)「競争やめたら学力世界一フィンランド教育の成功」朝日新聞社
- ・文部科学省初等中等教育局参事官付学力調査室(2009) OECD 生徒の学習到達度調査～2009年調査国際結果の要約～